

先週の礼拝メッセージ(2023年6月25日) ベン牧師

「主の憐れみのゆえの恵み」 ヨハネによる福音書 4:46-54

今日の記事はイエス様の宣教の初めの時の出来事です。イエス様はこの時すでに、エルサレムで多くの人々を癒しておられました。今日登場する王の役人は、その噂を聞いていたのでしょう。彼は病気で死にそうな息子の癒しを願って、カファルナウムからその時イエス様のおられたカナにやってきました。



彼の願いに対してイエス様は最初、否定的な言い方をされます。「あなたがたはしるしや不思議な業を見なければ、決して信じない。」(48節)

興味深いのは、この48節の「信じ(ない)」を含めて、信仰に関する言葉が3回出てきます。2回目はイエス様が、息子の生きていたと言われると、「その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。」(50節) 3回目は、息子が癒されたことを知って、「彼もその家族もこぞって信じた。」(53節)

最初に彼がイエス様のもとに行った時、おそらくイエス様をメシアだとは信じていなかったでしょう、エルサレムでの噂を聞いて、ただ単に息子の病気を治してくれる人ということでイエス様のもとに来たのです。ですから、イエス様は彼に対して少し厳しい言い方をされました。

しかし、そうおっしゃりながらも、彼に息子は生きるから大丈夫だよと、声をかけられるのです。この時でさえ、彼はイエス様がメシアであるかどうかはわかっていません。ただイエス様の言葉を信じて家に帰っていくのです。すると、途中で使いの者と出会い、息子の癒しの報告を受けるのです。さらに、癒やされた時刻は、イエス様が息子は生きるとおっしゃった時刻と同じだったのです。彼は、もうこのような奇跡はメシアにしかできないと、家族をあげてイエス様をメシアとして信じるのです。

王の役人が、最初に息子の癒しを願ってイエス様のもとに来た時は、信仰など持っていませんでした。そんな彼をイエス様は突っぱねても良かったのです。しかしイエス様は、彼とその息子を憐れんでくださったのです。憐れみと言うと、可哀想とか上から目線で人を見ると捉えがちです

が、神様の憐れみはそうではありません。私たち人間の弱さを理解し、信じきれない私たちを受け入れ、主の業を見せてくださるのが主の憐みなのです。

聖書の中には、その人の信仰に応えて、奇跡や癒しが行われる記事はたくさん出てきます。もちろん信じ切る強い信仰を持つことができるのは素晴らしいことです。同時に、今日の役人のように、そんな信仰はないのに、願いが聞かれたということも記されています。彼は噂を聞いてイエス様のもとに来ました、イエス様は彼の息子を思う願いを聞いてくださり、イエス様がメシアであるなどとはわからないままで、ただイエス様の言葉を信じた彼の息子を癒してくださり、そのことを通して、彼だけでなく、家族全員に、イエス様を救い主として信じる信仰を与えてくださったのです。まさにイエス様の憐れみによる癒しと救いです。

私たちも、クリスチャンといえど、力強い信仰を持って信じ切るということができない時があります。しかし神様は、そんな弱い私たちを憐れみ、弱さを越えて、祈りや願いに応えてくださるお方なのです。神様は、ご自分の御名のゆえに、権威のゆえに、私たちに対してことを進めてくださいます。信仰は決して、私が基準ではありません。私たちはすぐに落ち込み、不信仰に陥ってしまう弱い者です。そんな私たちですが、この役人がイエス様の言葉を信じて、わからないままでも家に向かったように、ほんの小さな信仰でも、主の前に出ていくなら、主は憐れんでくださるのです。

「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪は犯されなかったが、あらゆる点で同じように試練に遭われたのです。それゆえ、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜に適った助けを受けるために、堂々と恵みの座に近づこうではありませんか。」(ヘブライ 4:15:16)

クリスチャンの信仰は、ある意味、自分を棚にあげ、とにかくイエス様のもとに出ていく信仰でもあるのです。そうすればイエス様は私たちに語ってくださいます。みことばを与えてくださいます。聖書の言葉は私たちを生かします。弱くても足りなくても、与えられたみことばをしっかり握ろうではありませんか。そこから主の業は進んでいくのです。神様は完璧な私を求めておられるのではなく、へりくだって踏み出す小さな一歩を待っておられるのです。信仰、それはその一歩一歩の積み重ねなのです。